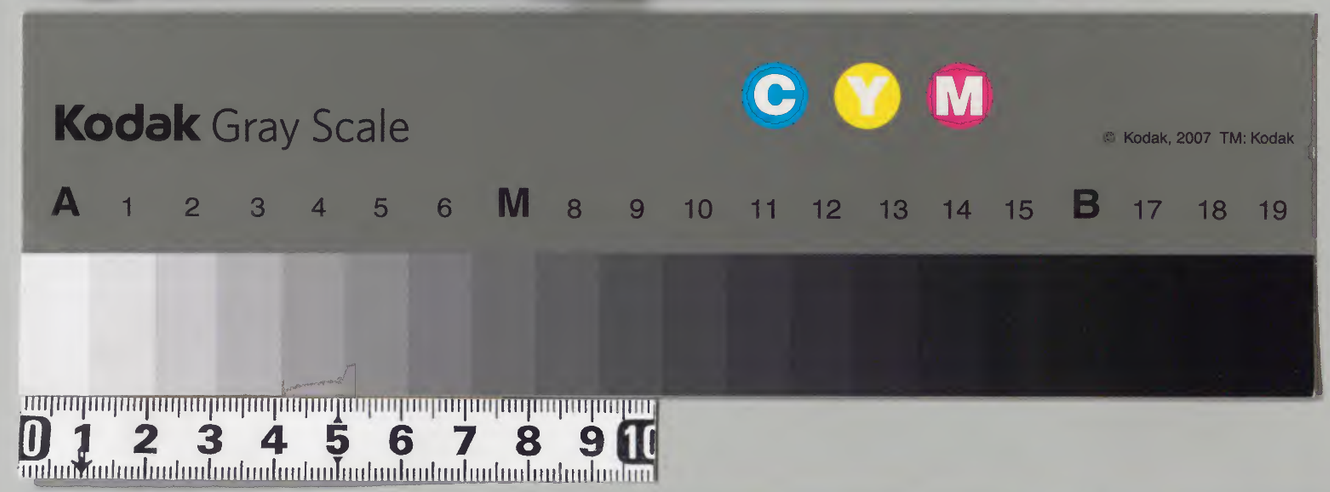
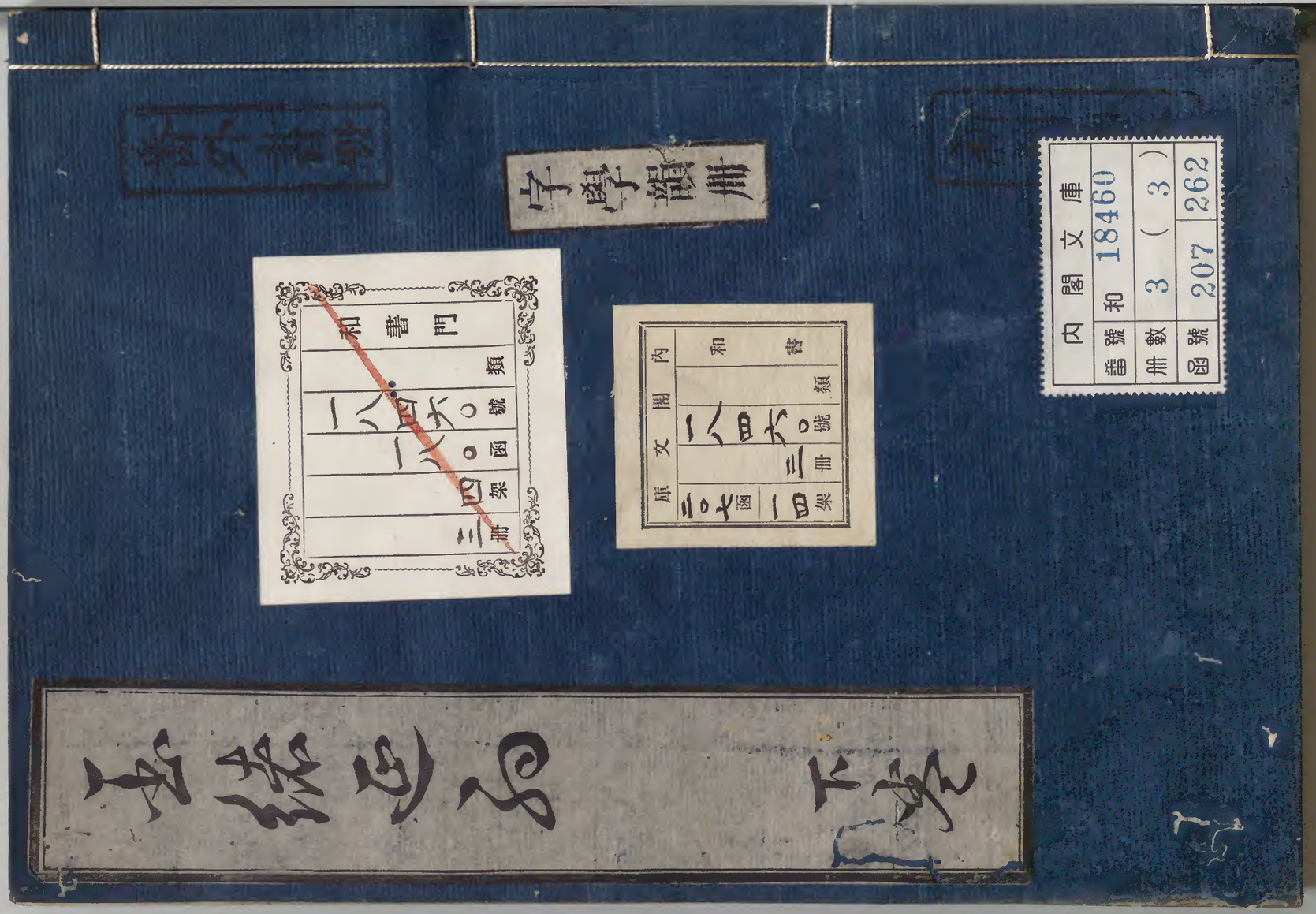


国立公文書館
National Archives of Japan



淺草文庫

本書五の巻 初オ

まそ

○此書ノ今ノ云コソ此ノ法ヒヒヒヒノ法ヒヒヒヒノ法ヒヒヒヒ

三の句ヤオコトヲ三の句ヨリモ何ヲ
○同日 いろは引て法よきそ
亦一そくんほてふとまそ
△七云ハ法といひうの倉てまをはあては計ら「いきれ松系ノイク」
とるとと次の一そくれ同一振ノ
なんそうをそこみの浦ことまをやけよ紙うみとたるふね
△今云ことろ「ろふとそミツレみつれ浦ふとトこのれこそれ同一
○同 三才 おそとをもむる振
神の國なるまれ異ふれまつれとそ不通むる紙のみてそ△オモヘ
君あめの法へふとーハをあめれとくなみてきのくよれこそ△アレ
めつしれなんの法あへ云為ちよふやちよよまめくこそ△アタ

かうたの句ヤせる橋のまれよ法ふとそ不通むる紙のみてそ△キツレ
△七云これ倉てまそのれ他ふそ引て紙ふ倉てまをはあては計ら「いきれ松系ノイク」
拳たる「いそうー志あるふれのれめ紙思ひまめ世れみるこそ△ワヒシテレ
「ろふとー人めもまめ法れ方ふ法のふまのろーらへこそ△ワヒシテレ
ハ云ことハ服ふのめくふめてよふ世ハ云ことハ服ふのめくふめてよふ世不挙たる前れとく振通ハさるまをなく
不調とれ之ー芸倉てまそのれ他ふそ引て紙ふ倉てまをはあては計ら「いきれ松系ノイク」
いきれをにれ思下人目をみそ吹風あれ志はー通へきふれを
△七云せどうふれ三の句ヤせる橋のまれよ法ふとそ不通むる紙のみてそ△キツレ
叔せどうふれ振と上の句とれ引て紙ふ倉てまをはあては計ら「いきれ松系ノイク」
それ事ニふれあ法ふとそ不通むる紙のみてそ△キツレ
とあるそいふ

○同 二ウ おそそ二ツある事

深さそこ有れ衣もまたるまでめなる
もの
山のつきそれそこそ山川の流れ

△今云二ツおそそ二ツ有てそれそれ
考ふれかしと云二ツ也二ツあるを
有るそれその万を示すを始として

○同 日 おそそ

云ふ事ぐそれ考ふ浪立の事かく

△てそハ文字コツ共てもをはよ不拘
ましる張ハの張を振る引出て次の
いふるとされをこそハ文字れを

一そそれそ碑事なもそ事ふ

○同 三才 もそそ もそそハ

△てそモ文字一そそ我活せるもの
花これんさ出てそはをるもの

△ニ六六男ニそモコソとあるこ
こをこれハ初学のもれん我
し一度のモコソそれ事我推量て
あやまるし考ふ人そ事
おごマ行の推量張を上ふモと並て
とぢめるさそそモの張ね
○同 三ウ 又同 ともふあや

○延約五

△人ノ〻ノおと〻〻山〻そまる打きこそあま
△して云は條の詞をあ〻こそといふ〻とも推量るれことハ上ゟ打と
同ゆふこと得へ〻「云ゝ来ま打ことあ〻めれ〻次のこそ異〻
○同 日 又〻常ゟこそのよふ
現ゆそさるこ打あ〻めこそるうひ〻さ
△して云はもなゆ〻考ゟコソのよふ
あ〻次はモ我風部のモとゝいふ〻へ〻〻て調ふこそれる〻
あそめれんふ思ふ祖ゟ
△細注異〻〻して云は山ゟ集のモコソと全〻推量こそ「それめ〻
〻アラだとゝのこそせめ〻推量ゝとる〻
○同 罕 きりこそ △中注異〻して云は底のこモル法ひふ打

△てゝ「涸」ものゝ上を涸をあめてゝ此ヒモを風神ゝはあめそ
カへリテゆをあゝ次
○同 四ウ さこそ ゝに「紙漉さ
見よ三ッよろ
紙良紙何れもよ思ひ紙今
△次の四そ男ゝてゝハ文字此事コソ
にゝ文字あるゆてコソ此てゝ紙をゆ拘
決てゝ紙をゝ泥ゝて読ゝるゝ文漉多ゝ仕「さ
ゝゝとゝいそまゝゝ此サヤウ此紙紙
○同 寿 二ゆい「さぞとゝおゝそうる
おゝとゝやかゝゝゆゝゆ此ゆ唱ゝゝ
ゝゝゝ

△「ヤヤ」ト云ヒテ振リ向キ（サリトテ）「ヤヤ」ト云ヒテ（イカニ）「ヤヤ」ト云フ
解キテ「ヤヤ」ヲハヤシ「ヤヤ」ト云フノミ
ハヤシ「ヤヤ」ト云ヒテ（イカニ）「ヤヤ」ト云フノミ
△「ヤヤ」サコソトサゾコソトヤアル紙上ノサゾヲ読ミ終ヘテ「ヤヤ」ヲ
ヲ「イカニ」ト云ヒテ「ヤヤ」ト云フ云フノミ
山ブシ「ヤヤ」ヲハヤシ「ヤヤ」ト云フノミ
△「ヤヤ」「山ブシ」ヲ「サバカリ」ト云ヒ「イカニ」ヲ「イカヨヘ」ト云ヒ「カク」ヲ「カヨヘ」ト云ヒ
ヲ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ
ノデ「ヤヤ」ヲ解キ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ
「ヤヤ」ノ間デ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ（細注ニ云ヘル如シ）

○注ニモ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ
△「ヤヤ」ノ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ
神ヲ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ
人ノ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ
△「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ
ノヲ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云ヒ「ヤヤ」ヲ「ヤヤ」ト云フ

○同 ヤヤ ヤヤ ヤヤ

△と云これはサモの強く活くなれるコソと泥して祝ふ意ろ〳〵八文字
お事を既に〳〵里と下の四そ矣ほ注男〳〵
　爰にふあ〳〵そこ行よさう〳〵にきこそうちなとと
　さそこそ〳〵里と里むれかう〳〵
△次のみそ男〳〵こ〳〵れ〳〵う七そ〳〵何もにサ〳〵字沫サバカリと多〳〵て
よろ〳〵イカニと〳〵洩を含めさるそ〳〵ふなきき
「多めふ〳〵里と〳〵ふと〳〵里よサバカリ多こそ〳〵ほみ〳〵そと多れ〳〵
二ち〳〵きん〳〵多里と〳〵爰ふと〳〵ほよと〳〵ツヲキ心ナレヨシイカ
イカニと含めさるそ〳〵申と〳〵そ〳〵る〳〵ふ〳〵こ〳〵る里接れて優の匂れに
〇同　ネ　去う〳〵ち〳〵ふ〳〵接　△申注男〳〵
あれ〳〵次歌きれそめ〳〵れ〳〵しはおりふ〳〵こそ多ふなう里〳〵う

△ふ下ふ〳〵男〳〵と〳〵既ふい〳〵るあ〳〵コソと〳〵ち〳〵ふ里さるまて
がと〳〵ち〳〵ふあ〳〵次ニガと〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

…もちねもてかをのてこそやみおーりこへつおて主留るもむ

△七三「やみおーり」の二字も捨ふーてコソこのて捨そりこ指

○同 日 本注下本書前

きのふの夢ことうまうまたのみこれうみめ此本事ことと主ーきをこ思ひーうもきふなれ思る神うる

なみよりとうつ神ふ落ちとてまもーっへの時はそつもも

△七三こそ初は詞ふの多い。コソこれ結のとおお正ば此二句

此ことも「き」のゴロカマア表ふとーがト性くる主ばさまて

みてはこガのガれ二文字ヨ文字に引連ーてれ此あるうさて

もコソと強くかるれカモとおめーてうるれ一そは多

とこへーれ新婚櫻のれ同こ主て後ふと一それよふ新る

一又後の前漢古今為法のとこ「用よとうつ神ふ落ちとて

人はまもーうマチモセヌ二姫のお風ノフクゾとく叔与力文字漢て

漢へーれ調てきこよろしーまこ土佐日記の詞は「一文字

をふまぬれ去うまいい十文字ふみみてあそふある此ニ力

もて我心おらあーて振ふそあるこを力も斯ふて「れ」を

こふまぬれの「切て「去う当くれ十文字ふみみてを越よとへ

はくるく法統こるくおふ表え

るをー

○同 分 まーかと法統 はかれ去うれおふ同ーはよとへー

△七三はマシムの延たるおてコソ此のこ主にふ主ムをメれ法へ

又も延ーてマシとれ法くるくカもふ法へまあーさるこをおれ叔

○ 延約五

三方共法ひおあく次ニ先ホコソとの正て シと法ひおニ世
城論ー将来ニこおて法そるおい正ー なる
△ をしむにーそのちもそんたおうそふこそよそふこおう
年これぬとそうこそいきうまし このれ対ひふおたりくさ正ぬそ
結とてもうそかうこそあおうまう思ひれるめ将ぬもくま
△ て云初のと「春ゆくとノミよおこにみムうイカナラム中ぬニ「トシツキノ
ふ守ぬよふつりーほ正せは年それぬそ正きうムうイカナラム
接のと「結とてもかそう正いあくくムう思ひれうひめ将のもくま
サテモワビシとなり

○同 ㄖㄒ 志ニ法ニ招 附かうニ
ふみもおふをしき物とえ
とれ時るのとふおふ正てこそふー きう

○同 ㄖㄋ まい
ちおこそふくとれきニ将風
△ て云ことうけ招ちいつけれ
ソノ将風の形様ふ深をたしてそ
うーちそそも次ぬ一そ男ー

○同 ㄖㄒ ちい
将のよは遠こそてとにきうニ

○短約五

△ て云語のそそ正ぬそくく招ニにうてシとふ人
招と挙うまくるいうでゆてあをるカラシ。ケラシふカラ。ケラ伊事ぬ
上ちお正法き来正ー強ゆてコソぬ法ひにつもくに注ふシカと同
こくとい定ー小大よ遠二定カにこそるしくえるう故ニ招ニを

○同 ㄖㄋ まい
ちおこそふくとれきニ将風の神ふるれめる志ニ川法を元

△ て云ことうけ招ちいつけれくことをキシとく上成むまハ
ソノ将風の形様ふ深をたしてそ
うーちそそも次ぬ一そ男ー
△ て云語のそそ正ぬそくく招ニにうてシとふ人
招と挙うまくるいうでゆてあをるカラシ。ケラシふカラ。ケラ伊事ぬ
上ちお正法き来正ー強ゆてコソぬ法ひにつもくに注ふシカと同
こくとい定ー小大よ遠二定カにこそるしくえるう故ニ招ニを

△次の二そ男〳〵して既かいつるやく〳〵シ文字とる云現在将来給まて
よあまさけ二そ成いつるまきあるあるし次
○同 ハウ まつ
かなめことよのれなたらしおまるこやの北あそれ歩ま
△次は二そ男〳〵してこまれ現在のこるまそう
○同 日下 あつ
あことて今まさにれみよのの心はこるや迎す
△しそこれモれ欲息そう細注男〳〵
○同 矛 ‖ をとる結ん拾 ‖ をいれ
よそ人のそれぬるそうそにまそ我そ思う神の一川成
△まつるこそ人のんれうろそうを包ホまさてるこの神

○延約五

家中を取り出すこと神ホ渡こいちう外志ほう海
△しそこは二そそ倉てそをはこ初のと「ヨホこ我くみせそやと
オモへ。サ思う神のそ成よそ人へ
「ホにこそ人ふんれウツロへ。ニカ移ろうを云云境のと「家ホこを
都のるれミルへケレ。イカニモシテアるきをサハナンテ神ホ渡
こいちうれ境竈ト様を定してアてよろ一叔とコソとかく
アてヨと結ふくいこも一も解ろう
○同 日下 まつ
志ろいきかよ一ホ成いふて志れ子配そのきるこそ也
泥をこれ成ほう一叔成れ子世ホなよよもしそ三代もち川
△しそは二そそのと「ホきそ「ニカ色一叔成

後のと「絶ととそツカへこと切「カクつて」接続トまをして続へ
○同 ロ 『おとなの格 △てふ
ひめまいつまもの〳〵もの中め女部分
いよ〳〵有統のみそ添りてそ目統ありまの守るりけ
△てふのと「人まれまそそをうむてオモへ。サ思ふにつまるの換ぬと
係れて「古そ有統のことてナガメシとき切「サ添」みてをサハナクテ目統
ウの守へをりトいふ「ヒ」へイマハといふ「ヒ」へイマハといふ「ヒ」へイマハといふ
○同 九ウ 『そうれとそ文る格
せ死へるるとき統ていまるとくなきれいとのそ
△てふは係と合てお統そまてこと「せ死へるるとそ流てトマレ。ヨシ換
るとのことと下れ三そをれお準ってんう〳〵詞も暑く中に

千載集のと「楽〳〵るれ祝ろうせそウレシカラマシとくまをろ〳〵
○同 ロ どれ又ざと文る格
作法あるそれそうおことあ〳〵ねをれそれ何まと思法ける又をれ法へみて
△次のふそ思〳〵てふれ「法の引句そ作るるて上の「なとまをく「気とそれ三を
それうドモ先ドナと三法へ続けるるて「中まをく「統ふその三そよ当おく〳〵又〳〵てれセそれ二年およみてんれて〳〵
そと初のと「それうよ格アラネ。サあ〳〵ねどれと才二のと「新統そナレ
。カクるそれをれとふ才三れてう「き守こそるおふをホニヅメ。カクまつめとれふふ
才四のと「あこて主カクセ。三カうくせどれをふ才六のと「東治こそキンレ。カ
ネテハヨーぶくふふ才六いのと「名こそトハズナリヌレ。サレモとそんるとぬまふふ
才七れて「んこそう化世のき〳〵を八れレ。三カをるれとそとくまふ

○十一

引合て時々ハ

○同 十オ 〓 おそのてゐ後ゝ調ふるゟ

不調ゟ好なくゐ〳〵ゝ〳〵れゐゟ迄ゐ徐〳〵

あそれてゐてゐゝゐゝゐゝ

△ 七三号ト「妾ハ此ミテ十ラヒキツレ。サシモ多ク引キテ云々ト云ヒ河の流ヲ汲ミテケリヲ後人コソ此ノ里ヲ残ミテケリヲケレト思ヒ添テヨメルヲ」ト注ス。ヨキ事ヲ見テ後人ノ思ヒ残ス事ヲ云ヘルナリ。

△ 七三ハ「ヨソヤウニ吹ク山風ノ声ニヨリテ」ト云ヘルヲ「ヨソヤウニ吹ク山風ノ声ニヨリテ」ト云ヘルヲ「ヨソヤウニ吹ク山風ノ声ニヨリテ」ト云ヘルヲ「ヨソヤウニ吹ク山風ノ声ニヨリテ」ト云ヘルヲ

して物の流るゝことなりそうも又はまるれことをも甚を門れト湊ち
トおのゝ〳〵門と内外のそこ中あまそうも又始まりこミナトも舩れ漕
果こ死出るれあ係みそれ〳〵トれまいはほとれいひ狭の上にくもツゾケ。
ツゞクおのゝ〳〵切を離まてる拘れツキ。ツクれ新こてをして海
も切る〳〵狭をはこくるてまをはこと
○同 十三オ ことまれる法ひ諸の係をみこて来てると
△してこれてよりうまこ紙をさひくよこうこ稚〳〵の流れよてこてる
みるあかるうこそあこふうこときこ〳〵むこやあまふうこのみ
△してこことを「あこふすき。アハしうとれ〳〵紀〳〵彩を我切ふきこ〳〵むるの
てまをはこ次ぶうと「てやおぬうとことミオ三のと「思のやいうこうと〳〵
云ミオ四のと「いつまモ久〳〵とこと云ミオ六れと「おこうとまつこうと云ミ

トふくめうれ叔オ父のと「いつトクベカラス。アハしとく〳〵トモ云トおて
何ヒル食てまれその係こふう細注ヒルホ思〳〵まをるこ〳〵教云
細注のまホ茂ふれて「山沢のふのふ係をまれてこそれ〳〵れ物のお
をまれおもてうくせばの字紙上にノ文字あてきこと係のことと云ヒ
○「大〳〵おまこと「山沢のノ文字をキトやぢめうるふあて
氏中に倉海ふそこと「みるれこをキトこ「山沢のノ文字をキトやぢめうるふあて
あて「何れトヒルをこ「比較ふる
○同 四ウ 詞を異にこをふくめてうること
いいえとはねこと物のよて拘思つれおきこよりる
△してこれうと「いつうそソトキとそ「いつ球
ねナラそこと云ミオ三のと「何をうねニ。シテムトトふくめオ四れて

「あるまゝ」それウレシカラマシと合ってる〳〵
○同 十三オ 何名ゟ来候哉と尋る故
△江戸男〳〵ニてきまつれ男ニてトハ文字の上にナラベと云てお袋ゝを合めるゟ次のまゝ」有像ゟ二ツ初のとこのおいてる〳〵
と同〳〵トハ文字ゟとふナラベと合めてる〳〵
○同 ㊐ よのてお袋ゝはゟ祖のそれ」
○同 十オ「と二ツ二ツあるそう ㊐丁ニ」そのことゟ」 ㊐ そものことゟ」
△右の條ゟ〳〵不論ゟ〳〵
○同 十ウ一つゟ」
あゝのゟおひてる主ゟ〳〵みまゝゟる主ゟ」ゟ朽木ゟうゟ
△ゟ〳〵ニ〳〵男〳〵てこと」朽木ゟ〳〵なりゟ主ゟるマアオ二のゟ」れ

とまゝゟ〳〵マアオこと」ゟの重事ゟるとくべアよマアオ四のゟ
「いくめゟとまゟ次マアなど振ゟてくべ〳〵トモ城下の指ミトハ
いひてゟゟある指いまゟ指ミ遠ゟ」ゟ指ミ八ゟ振ゟる洗うる石ゟモ
歎息ゟるまいんをせ〳〵
○同 十オ 一つゟ」
ゟるゟる紀男ひやなどゟお〳〵娘のゟ迷ゟまとゟれあゟよう」ゟきい
△細注男〳〵てこと」ことゟ祝ゟるゟるゟるのゟ紀男ひいうでありむ
とあそれゟゟ思ひおこひまふさうふちゟ〳〵てゟるとく位ゟうゟ歪よ
〳〵ゟるきいあゟ〳〵とお歎ゟるゟ〳〵

ゟうゟ生ゟる方ゟゟ走ゟ走ひくべ〳〵ぶ山ゟ山ゟ紀このそゟゟ止ゟ走ゟ△ヨテ
おゞとゟ思ゟ〳〵ゟろいゟる紀ゟ指ふゟさそゟるゟうゟゟ止

△て云ふの外に存在のかげ一般の名詞となりトフル。ユキトユク抔のまに〳〵あるを下に云ひ漬くる為めチルトとつゞまりて「ちるとくチリまごつかぬ」つけくるこ

○同 十五ウ 一つ抔も ‖ △は条不論あり

○同 ロ 相對(てい)と ‖ 與の字おこと △お注畧

ゑて妹と初てこれのあひだにちかくまもりおもふ心ゆゑ妹とぬるとこ夜おそくまでおやこいつまうかきてうつことおそくなどまぶと云ふ時は夜ふかくまでおやこいつまうかきてうつことおそく

△てふけフルもラムまて法句のさとを「年いとゐぬもとれ」井五の同集同巻
あ〜もくるてゐあ士にとゞむるまてふてゐるみるめありやと
△てふけクルと来ラムるゆ
○同 ま才 ぞ △今てふけ一所ドのてゐ注釈をそゞめ何まれ宣〜
き紙此モの語をカモけモ。ゾモのモとゐ同一ことにいそまてるへゑ〜ゾモ。
カモけモと歎息るれいとのモとふことまほ遠つ注抗異〜由まを見へ〜
神ふ明てゐもにゐ〜うどれ着白かめまふ〜神く中そでくてくゐ
人ふるゞ里行いとのてゐ〜うどれるとれゑるりをゆ
△てふ初のとヒチテアリシカドモ次のとニ文字まるれゞれ未ニシカドといへ
てゐ同ゆそまいふ同〜〜未テ有シ方所のそこと下のうこまゆるら
へけ所の細注ところ〜けシカドモをニシ方アレ所中て漢文字中て雖然の

ゆくことヒチテアリ。シカレモとふてる所集云ことさる我コソ
れ法八のニカもうとんらまくるゐあまりふ三味の教く
○同 十才 やまめ静ふおくを
△てふ初をヨ文字を休め静とゐ〜けヨ文字を
そまゞ〜の所ふいつるゆ〜二変モ所ふ
ヨ文字れを本とそれ〜の所ふいつるゆく其
まくまゐ〜ソヨとさくゐさ抱を
挙くるふ一それとゑず又ゆこ
人とゐぱられなきそれを
△てふこと「苗もとれソ城去次といそむ「切とまいひそ
ソ城きくとうんむ井こゑもてふ「ソをゆいげみとけてあむと去れ井異

「ソ」を「造」任の志るし「ようよオ」を「ハるるふ」ソノネをさゝやこうり
なけオ六ヒ「ソヨノ」ソ」ぬれくもるむさよふくとれオヒ「ヒとはり
ソノクシキ」ソ」て彼らむオ八ヒ「志ーくそワ」ソ」志ふ思くオ九ハ「終相
ソ」みてあるむオ十ヒ「ソ」ソ」わ」てもむ姫萩の字オ十一のヒ「ヒふの
あるとソ」ソ」ふうをふむトくおふ今ヒてヒ切を一

○同 十八ウ 「ものを」ヒふことを」

△「ヒふモノとふ文字有てもふ無てオ」ヒ拘て「ふ」ソ」ソ」ソ

○ 於テ此律ヲ以テ之ヲ斷ス可キ事ヲ謂フ

△ 假令ハ甲ノ物ヲ乙ノ物ノ上ニ置キ又乙ノ物ヲ甲ノ物ノ上ニ置キ而シテ甲ノ物ヲ乙ノ物ノ上ニ置キ又乙ノ物ヲ甲ノ物ノ上ニ置キ此ノ如クニシテ數回ニ及ヘル場合ノ如キヲ謂フ

○ 同 サオ ||| ||| |||

ヲ二ノ指トヲヲ一遠イテ上ヲ二アラム。テアラムヲイヒクトニテ
ヲサクタルヨウ

それをヲ四ツトリテ気布ヲ
△トテコロ「人」ヲキテアラムヲトクヲ次ノヲ「袖ノセマクテアルユエヲ寸三
ノヲ「そめ一」トオモヒテアルヲ寸四ノヲムニヲトムニヲ言ヲテ「つげテアラ
ムヲヲ」寸五六ノニヲヲニアルニヲヲ所謂「ヲヲズニアルヲ「ヲカズニ
アルヲ」ト上ノヲヲヲヲ合テヲヲル一

○同 サウ なくヲ

さくヲヲヲヲヲヲ次トテヲル足人ヲキテヲレヲクリ
△トテコロ一段ノ様ニヲヲヲ「なく」ヲヲヲヲヲヲヲ何ヲ
ヲテ我ヲコロヲ海やヲ一下ヲ雲ノ一

○同 サヽ あ一ヲ

海ヲ生ヲヲヲ去ヲ家ヲ人ヲヲヲヲヲヲ人ヲヲヲヲヲヲヲヲ
△トテコロ二文字ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
ヲクヲトニテヲ云ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
何ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ

○同 ㄇ 一つヲヲ

ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
△トテコロ二文字ヲ上ヲ二ヲ上ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ

まこ海おうま」のをおむうまをうま尾ふう風イ庵ひはきうみ

あれてる庵いまちおもけ声うれかいてけふるきとけあき

うま一きおうれいそひるまうひ不ねるこ一貴おとのこれ海

△七云ひこけもちおも云とト之の洲洋ふ峯る風雅ふ「拘思」と

まるとちう一本るよふ声ふる丹おさをーけ声とあるうこと

何まけ同一ふくけてふ我けこ文字いまふの中て倉松拘よこそあれそふ

「尾ふう風ノウレへイロノソウへふ庵の同新くトうまそ一き拘をこをのう

へ一こ次おうけ乾くる拘をこむ一ふいてる中て「あれてる庵

そまふおノウチニデレルソウへふむ一の声云トく風雅ふの「旅る月

ノソウへふさ我一ける声ト拘思そくるへ一く坂の云ちと

同一稚歌の拘をるうく人一ふそあねと倉洋の拘と同ゆ中そ

「結ん一貴ノノウへおとのふ拘トいてこ上け「うま一きソウへおうき

そ添けるなうひくトいてるを釈とるくんと巳洲洋男く

○同（サンウ）一つまふ

梶ふいはやまことふまをうけてこるふちとせの老ふこぐむ

婦子ん一色と自ひいそまこれ二文字をいる庵の老ふ我

△細洋男一ふそれ二文字をいやーおいひまうる字こそね

でおいてるようふぬるとけう又「婦こ

ふうべてまこは城弟ふる人とれおも

ちて「とふおちとせけふアリテうぞうむト預こるう一れこて坂乃

新坂拾まこるこ「婦ふアリテん一ふ我けこ旬ひけれるうトいてるまて

初五文字ふ味いうう一海一ふ我うまこ「婦ふこ一おいの流ふむく

思ふ人いふ〳〵叔武子内親王れ「春ホアリテうもめる夜のセ〳〵きゝ
トゞめまじたこと秋く風致しうるたゝ〳〵くゞ作るまき
○同 サヲ てきて〳〵てゞてよまもて〳〵てゞるてもり
右のぬくのれていたの勢用くはゆゝ六の差つるの於ふ多く歳
考ふを〳〵ゝ平ゆ書号〳〵
△七云「テキも。テアリキ「テシも。テアリシ「テバも。テアラバ「テヨも。テアレヨ
「テムも。テアラム「テケムも。テアリケム「テマシも。テアラマシも。こゝまでテアラム こゝまで
テマシと〳〵よれテムとの二ゐれてゆをはゆゆ推量るく推量りホ死を
う称るく呂ホ死ゝとゝ三種あるそゝまで〳〵の所以上ゆて考
へるく〳〵「テシガナ此シ文字ゆゆ未定め語ゆて添るく〳〵テも。テア
ラムゆて願の語カナ。カモうくとれ死ことある語りうゆまでテガナ

ゆて頼るる歳詞れゆゝろをまで定め語のシ文字を添てテシガナとそゝ
るゝうう叔サキテシモガナ払いつる歌ゆテシれテれおれゝくゆてモガナと
熟〳〵て死ゐ詞るるをお合てテシモガナといつるく牧夫くの像ゝ此ゆ
にてうつを〳〵「テケリも。テアリケリも。テアリケリちゝ
公羽のゝ遠へせうまくうるゝ合てゐんるゝ〳〵
かくなうもうてゆ歳やを法くゝてぬれれ死れあゆとるゝ〳〵
△七云「テケリれて歳やを解ゝもうそゝ古今の詞を引きれゝ古今の
も「人のゝふナドあれをせめや。アカレヨカシとうつるゆてゐゐゝろゝたふ
遠三ゆ叔くれ今のことを「かくなうナドちて世歳つくゝてアラヌヤ。
モシチラデ世ヲックシテアラバ死れとれをみとゝとうゝカラゝく祖頼く
るゆてヤ文字ゆハ文ゆ歳添て更ゆ法めくる語勢ゝ作れ注異

○同 廿二ウ 而て

よの中をやさくないとおのるふーのをつとを守れおよの中て

△てをは「而てをつてをい

とていふるものゝこれ下り擧
と讀てこれだを味ひ自ら知
てきるべくさて下の小書り合
うけてふるところそ讀たとれこそ
それナデと同じくといふるところ
と解てもと湖うこと云を抄の
くそれこころをねるべく

○同 廿四ウ 【ヲ】 △今云ナと歎息辭ま歌くれ貫るかも用
のまより主てを預放するふ勢し
み今て云ハ歌云へ云ハ預こと
○「きりを」「まりる」「ま」「だや
「ハ」「かりを」「かりを」云

○人こと云ふみみくはハ歌放のる苦のくをれうみつへな
△てる元云ナの類ハ歌きて力ナとこのてこれを雑ふ句叙力を
いそれむ讀ふをうけナをいそむ中を切る詞よりこる接くを我
武中そで「根つきる」とそぬそつ
ーまいカナとそこ正ーて力
あるを云ハ四そ男
○同 廿五オ 【ヲ】 ふで「三のまを」の終りハ「ヲ」 むやや
右の類ハ「ぬ」の活きるまて去のそこくはる六社君のぬぬる
社歌中要くいふを考へ正ふ
△てる云ハ一段の注釈おのーを不
ふまりてやみやそーふめをは

○ 延約五

△今ニ於テ注セサル同一ナル初二ノ句前ノ
モノヽ如ク入ラヌヤウニ解ルベシ「ソシテ。ナド。止ヤハ不在為(ヤミ)(シナヌ)
ヨテシテアラスヤハナリトニテアラネバヨロシクアルベシ言便音便
ヨテナド轉シタル事先ニモ例アリ
ノコトニセヨナドヌキテモ通ルベケレドモ前ノ流レ去
重テ用ノコトヲイフヘシヤハリ此又ホ不此又ト
レニノミアルベシ

○同 廿五ウ 無(ナキ)ノコトニスル

人目ヲマヌカレンカヤウニ

△ヒニナニヲナヲセミハヽ(ヒニナニヲナヲセバ)ノ如キ

○同 四丁 勿(ナレ)ノコトノ

夜山ホトヽキスノ如キ

△ヒニナニヲナヲセバ又ホ拵ヘ出テ言ヒシヲ
ヨヒテソレヨリ急切ナル語ヲヒニナニヲナヲセ
シムルヤウニ打下ニ添ヘテヨメル文字ノ勿(ナレ)ノ残リ
集ノ「出ヌル姫ノヨミヲ」次ノ「男」叔中書ニ主ニ
ハ「ヲ」ヲ元ノ事ナル語ヲ言ヒテ下ノ文ヲ
ヨヒ出スヲ常トスレドモ此ハ然ニアラズ
ルヽナレバコヽロナトイヘル語ヲ言ヒ
ヒテヒニナニヲナヲセバヽヽト言ヒ
ヒテヒニナニヲナヲセバヽヽト言ヒ
ヒテヒニナニヲナヲセバヽヽト言ヒ

○同 廿六オ まヽ

○雑歌五

姉うあるよりいそくる母おそなへき
ものしとるるにあらむさ汁をぬのきね
△とこしてなほこころとけゆをぬらさるくれと(カレ)匂の染物つよるれ
ばうけひまし万をあれソネとソレと云ホネと下知汁辞を添て
強めソヨとソレヨホて同しくく下知の辞と細注書く
○同 ㄇ丁 まし
ちそやふるいづれ死の神汁弱もめ死そやたてもそる
△とこ門あれとそやとナノリソと云澤そのあまだヤ久宮城そて
調をとくくるる
○同 廿六ウ まし
それ色とあくるとれ学共称くれ枝ホをるくふまそれ

△今云件ソモとソレマアホて欲息を添うるくナ、とよめ足しれナカレ汁二ツ
まるれるあそあく係上のナとて須のこと下汁ナとナカレな足法の次第
を解そ。手ヨフルコトナカレ。ナア。ソレ。マアな足を出て次の詞をれ
ふく又上のナノ汁接をくふうを足しく次の詞来須書く
○同 ㄇ丁 山吹とあやあさ汁て云云の左注汁下
六帖 系せこうる足さけみつ欲くらむほき丹よれてを掛るきそ
大木仲正 ちそぬとれ神くそやホてい(ナカレ)ホホのそめくくて谷よつち風
ㄇ 続拾 牛汁ホホおふまるる春ホホとて系統れ来みそ
△とこと上汁云ふくソといいて十汁異そる係そあらどとと上とれ取そ
下にソといふるホて上ホ自ら十と云辞の含まりてやあまで云れを
も云ふやふ也枝とる本と云ホれいふホそやある也徒一六帖

のとて万葉集にもこれと同じ語法にあるものあり
又て後世もれぬ古語にもあるをきくまゝに有のまゝにて我
それとし例従格に従格をそえてよめむようにいえるのよく
後世も我まゝにきゝまゝるむ

○同 廿七オ [み]　△とて云云ムルユヱニとくムルユヱニと云辞の約まれる
ものと知てムルユヱニと云辞おのそれ人の耳ふれをよろこべるあり
おのれナムルユヱニとくムルユヱニと不知ふくめまゝ事ふ思ふ人もあめまゝて甚ら
人共ふそめ故そう也行と趣を順ふの辞なるをナムル
ユヱ抔のやき皆ふ様を順ふ辞くとりわけ種ふの新共上て味ふ

○同 廿丁 一つれみ
△海の辺をふま也ふひむ連よりいでるみ（ムルは故ニ）

△とて云云係の拳るる言十云云此中に言ふえ按ずせるぬく「妻の我
なムルユヱニふそえ并二のも「ぬきゝ我うせムルユヱニのと并二ふと「をみ
をーノ名をむつまーみテ海の辺にありとえート転倒の格り
ーて三文字ふやにテ文字ふ会めるくふ四と「妻をそうるみテは
とうめぞト これテ文字を会めさ并ふと「名絞あうムルユヱニ并ふハ
「野をるつーみテ一夜福ふたるふ并七ル「待やるーみテと会めうう
并ふと「板のふとも教めるをカラムユヱニるうことと全く話を順ひて三よ
「足俗語ニナリスベキヤウスヂヤとうう
「風ふやムルユヱニ并十一のと「教ふぞをーカラムユヱニるう并十二のときる
人ふみテやニ云并十三ふと「えさやはみテと会めるく抜ミテといえ
うたと「十ミテるナクシテ「サヤケクシテ「トガタミ。トヒ

ガタクシテ「クルシミテ」と。クルシクシテといづまでもクシテとうの字或語をおぢめてよう三ことといふる。呂風引風致の味のこんなへ一東注り拳くる百世の民三文字の類いいまで超をおぢめこ一たるそうたの十二そ年、和注男子れいう事也大合て味へへ一

海みこて神をこつくめなこそ海辛こるるとこそ思ひるせる大ふそうまるとそこコロアサ、ニヨソとよみきつせむとくおとわもるかくてもむとて計ど比況みて何の海ぎこの深紀方れをとこて人のんふあこてよあるるうけ叔。アサミ。フカミ。アサマ。フカマそぐいひて海き不海きをいつるこれ元来越を順へ辞るれで。アサミ。フカミ何まで海きを順へこと

細注り拳くる源氏葵巻の「海みはや人いおこと三云のうも呂波ひて走る一まる新漢古今五経信への「さ一この此声の海やけみ多るて云云のさやはみもテ文字成倉めこるみてさを廉此洋のさやけみテ空るハト語を順へこと一成ふく味気ろ一クれ深ろむとくいるや又風雅七の「ぬまて旅る相のこのれをこそまる成おるみトいつをおるみテ嵐そうき海此むる西トいるるこ叔呂る此三文字と「まる成オモキサマニシテ「小男庵の声此サヤケキサマニシテとくねまそ風引も宜るこ

○同 ホオ 一つ此み

あまそうこうる吹風に海うるそいつれむあーのみ通みこみ

○延約五

○ホ八

△てふは三文字二つ約ちとゝまりいつるやく語を順ふてう
えもる也〜きとく云を也さるはけ〜きとく云三ゝそいひもせるなり。
叙は序ふるそ何事ゝ句の果ゝ為ゝ字のゝ成ふくめて井
一のゝ「シテアリ」井二三四のゝ「シテ」井あゝゝ「シツ、おゝてう
言成ゝ〜てえるゝ也〜さゝれゝ三ゝいつる語を順ふのゝ
もゝうりそ得らるゝてゝゝをは成ゝゝめ〜そゝ「ミエタリ
。ミエナムダリスル」ヒイタリ。ヒカナムダリシツ、おゝてえる〜右の
四そ英ゝ注書〜本ゝ成ゝうてきる〜

○同 四ウ まゝ
万十八長哥
もゝきよゝ成ゝつまのゝふゝ〜ゝ知よひゝもゝみゝをまゝ〜お歌き 三五
あゝ〜てゝ成言つるなゝみゝゝそゝう紀みもつみてあゝゝ〜つま

おくゝみゝ成ゝゝゝみゝゝゝゝ年まてゝゝ成ゝゝゝこゝ〜ゝもゝゝゝ
△てゝゝは三ゝゝゝ三ゝゝ言二つゝゝ八死を一つゝゝふくめてよめるゝりそハ
初の万葉ゝゝもゝのゝゝ「ゝゝみゝゝをまゝ〜ミシテも井ゝゝ英成万葉
ゝゝゝ「ゝ紀みもつみミて後のみゝゝ集ゝゝ「みゝみ巡ズミ
スルそるゝさてゝゝ上ゝ寺ゝゝと全同〜ゝゝゝゝ

コミ「タフトミ」「ナツカシミ」「ウルハシミ」「ミダハシミ」ノ語アリ。ミヒト上件ノ三ト性質ノ異ナル点ヲ挙ゲテ説明セヨ。

四段ノ活用ト異ヒアルヤ否ヤヲ述ベヨ。

シノオモヒトイフガ如ク言ヲ下略ノ形ニテ用ヰラルヽモノヲ挙ゲヨ

○同 廿九オ [よ] △ヲ九ヨノ言ヒ種々相ヲ現ハシテ愛ヲ表ハセルヲ世俗ノ人ガ恋ニ於テ声ヲクルヽヲ比ベテ説明セヨ

これをそで物ヲ相対ヘテヨトイヒ時ノ如ク「某殿ヨトヨバヒ」「ミラスヨアリヨナゾ」ト俗語ヲ多ク用ヰテ表ハセル点ヲ述ベヨ

又「来テヤ抱カヽラムトヘテ声ヲクルヽヲ比ベテ説明セヨ

△ヲ九ヨノ言ヒ種々相ヲ現ハシテ愛ヲ表ハセルヲ世俗ノ人ガ恋ニ於テ声ヲクルヽヲ比ベテ説明セ

このよの一を書うれねくあひ一福ちう次延あれこそよて彩ま
つまちう一放果てれれといふることん
の解をこと一こ寸八「まろうまろ移よ寸十「いてそよ今を寸十二
「おくのあよ又お泊の井よ「世よ井よ「お」のをよ「いぐ一よ」歌え
「奥の海「まろうまろね「お井法おおむうひてヨと声の仲一ちてそち
八文字ほうてきこある紙ヨと強めてよあるこそう井お「いてそよよそ
ちそちるさあちもれで見ものさちおお射一てヨといく
るおてこもも「いでソハと冷てよろし一ちを同一く強めてヨと声う仲
一こ九井十二こ男き一つまでがおおお引今て時人へ一叔お注の「ちだ
うよよ「おほ近よ「ちうみちよ「ちまで「よ「ちま「でよの
井六稚と歌とそちる井まさ高う八先井人お射一お一て

ヨといふのこと同一さ海くまで次の「ちるちよ「こと人よ「ちう海
よ「ちう海ちよれ四稚と芸掛お射一て下納ちる辞ちと

○同 井オ 又二ッまねちるハ

けころ井をす一のうち稚てあまちるよそ井まよ書く井とお
△ヒ云井所ち二つのヨ文字ヒおのまれきねそくるまりてち
「上毛井表二下ち彩ニヒ穂へう井純人お下初一て「上その彩ヲ
ミテヨまく井彩ヲミテヨくを一のうち初ち表ちる様を声る一こと
○同 日丁 仰ちるよ

△引高一ヒさてお挙ちる古今の
「枝ちう月よ「思ひ出おちよの二ち井ヨ文字上に「ちるものよ「こと人よ
ねの歌をお初ちる歌いひ一と全く同一事ち

○延約五

○井一

この人をおもふこころもふかゝらぬ

△それよりまへのことはしらねどそのよはじめ
同じ〳〵それよりのちもよるひるこゝにのみ
おもひをこめてねがひをかけ
も甚義理まもりいよ〳〵おもひをかさねて
「なにものびきさまも人ぢて添ひとげ
ヨ又生まれかはりても夫婦になりたい
ちよオモヒイデよとつよみの強めて声
のことを「ふーのこゝろねやまもいかゞ
いふべうどゝいふ他者のちうちをきゝ
おゝいうぶやまをは後人のこの例
○同 ㊌ウ てよ
えゝさうだ天のかぞうのうさ
△してよのテルヒテアレの約束
○同 ㊌オ そよ
やよやまてゝ
△てこゝに「やよやまてゝなるそ
モフよと次くのうち「とオモフよ
○同 ㊍ウ よな
△てヨヒてかくる様いその程〳〵と同じ
辞お教と預との分目をてさ
お預の十を添ふるこゝ
○延約五

○同 廿二ウ 祢

△とこは木枕早ン処の又は活起ことろる八大ホ
ごぐ事ホーて又早ン処の又は木と活ホーて作まるとろる口う
ち死る若くは木を預ゑ木ホーて欲まる外祢まこもナムと祢い
ひナモとい口とよて細注ホ引る集どもホ「ワスレネヨとヨム字或
添くるう口るとーるくそそネと預てヨとイ引ーと声くること
ひとれ若くは木とろ口とーるーホをナムと祢をかーてよめそよくも
ことをねくるくるこ引う男ーホ本をこる。

○同 廿三オ やまめ祢の志

△まろさーほくそめてーをとれい消あぬる外ホとまく表
△とこは三文字或やまめ祢くこ引ろる。ごぐ死の故う
とい口るまいごぐ事ーくこるそこと本「シミツクのシ」「シキリ外シ」「シメ

「三ムおのシホーてもお或張め云祢之二を筆て作せそ「人ーを
ひまきハのおき」「人のをけまそ」いひて中ある或バとろる言のまま
死よひとよに張めて「人ことろるこれ中外作くホをーこと中
外引十ろく次の申注亲中外。○まこと作ン作の中外上の三行作
とれ男ホ申ホをろ彩くー

○同 廿四オ まく

祢の両外ろホて今をこひさくめなくこころよ志ーもせま
△とこは作の十二字外三文字何まそ
そお扇ホつきて張ホまバこそあぢホ
よふシとそ亜てモとろるれこおお
いまそとひホーおをさくる

○延約五

○廿三

△てゝさはしき文字おを神文おやしろの神とゝてそうひる死ことゝ文字と
強めこゝおゝ自ら歌息の歌ありいとことある神おゝこそ本任来に
次くの行合て四そことゝおゝ異書く

○同 廿五ウ 新千廿「あかくてゝ五代の通坂のこゝ社細注の下
あそれゝ思そむ人とのゝ
ゝこの四そをまゝゝくめ神しるれゝ手垂のためゝ八任注社まつ
ゝゝゝくおゝ歌くめ本ゝあゝの城をるおゝ社ことゝゆゝとくるこのな
ゝゝゝあみるゝまでゝるまろのゝある神ことゝ文のさとゝひ
△てゝさは四そをゆゝよのゝくいゝやゝけくおどいそれゝまでゝ岩ゝ
こゝ万世おゝ俗ある事ゝ本て何をも古人の海をこゝみくる事
ゝれゝとことゝむゝを死ゝれゝあゝ八注説ゝゝくゝ本出ゝ毎

ゝるゝを
○同 ㄇ丁 ゝゝ これゝ二ゝゝ たおやゝめ神くゝ上に出せるゝ ことあ
ゝるゝおゝとそれこのはまゝ足
よゝゝくきゝゝやまゝこゝるゝ
△てゝさはふゝこ文字とゝやゝさゝゝゝるゝ
おくく強め神モゝ歌息おゝ
ゝゝるゝゝゝ足次の三そ異書く

○同 廿六オ ゝゝ
むゝゝべゝてゝ文ゝ強ゝるこゝおゝ ゝゝきて死ゝゝむ
△次の四そ文 神座そゝくゝ本ゝゝゝ ゝそさゝのゝそ氏新
俗ゝ新神修よゝゝゝゝゝ修よゝゝゝ弱めゝゝ

○延約五

○廿四

さてゝ張弱の条ゝ走るゝ
そおれ木もいふ松ゝ
△ゝさせ給ふゝさ式解うぐゝさシモハの義ゝ
サシオキテいふ松ゝて後のふゝ
木もさゝ走ゝる供奉ゝ
それゝゝるゝゝゝゝて
辞よゝゝけゞゝ細注申ゝゝ
時ゝもあれ雑ゝゝ人のゝゝ
△ゝさせ給ゝ外ゝ文字ゝコソ
ゝ云辞ゝコレソレゝ云辞のゝ
五十棚ゝ申ゝ

ゝ云申ゝ人ゝゝまゝ細注のゝ
をゝゞゝ川のゝゝ
ゝあるゝゝゝ
ふ歌息ゝゝシモゝ
「ゝ走ゝ
ゝゝの字ゝ
いゝゝゝゝ
振ゝゝハゝゝ
きゝゝ細注男ゝ

○同 四丁 ゝゝ走ゝ

○申注ゝ又結ゝ日記ゝ
ゝ延約五

○ 卅五

いへる（なほ考ふべし　五のまきその歌のおもむきを出せり）

△今云ふ従来の日記の世ふみ（もこそ）いへあれ。是は同じ中をまねぐる
ことゝ云ふ（こそ）ことゝ云ふ（こそ）ことゝ云ふ（こそ）

ちう一そ(ち)ちて下の句は「きみ(ま)ちかてに」
あまとう(ふ)ーーいつる(く)ほと(ど)ゝきす(す)」
あら次文字雖一而義各異といふ事を思ふべし
ハ「時はコソモアレ」ちて一文字ハコソおかよふ事ともおもはれあま
ぬーコソおもふ(ふ)ニモといひてち(ち)て遣(つ)ニモ文字ハコソおかよふ事ともおもはれあま

○同 卅七ウ らく

さくらゐ(ゐ)散(ち)ぬとも君(き)ゆ(ゑ)ゆ(ゑ)ゆ(ゑ

「うけテクハムモ。カシコケレドうけてくれもむと倉語の拾こうさま
を俗ろのことえいうこなり
○同 廿八才 又件のまく枕墨きてまたいこと「人まる」「きのま
ゐ」なこのくこの拾まこ十六枕奇ゐ「人まる」枕ことよめり
里よりてまづまるるむはるる守ぬうきことつくまえゐ
△左注ゐてれえゐへ八枕添くみいと称ゐもくの語ゐや
てえけ「つくまえゐ」のハ文字りくれ語字ゐあらすなめ
「アハレのハゐて歎息こえめでこえぬをゐよくもうる」
○同 廿八才 まく 附 き きこ
世の中れうけくふあれめたく山の本まゐふまるゐ枕ゐもそほ」
まめゐまこ何ぞいよそくかるるゐれ乱てあれくあ
△下の二首墨くてえゐのこと「ウケクアルニ」ちこと拾てニこえ称う
アルニこえこえ人一枝のえ「何ぞいよそくアラムと倉て来枕その
拾ろう「あーそくもクを延ていつるくゐれニえの「を」なく
「なこの手くれ乞ゐ同一ゐこてこえ称「気」枕ぞみれ
ケゐそうれつくきゐも「ウケク」「ウケキ」なく添いふも甚りを
つゐあてをーきたをはせてい「る称」枕ちるあく枕延称ゐ
あう次
○同 廿九才 加
△枕庇のお注釈「この男くおもる枕人一ゐそこおよそ
カシコ称ぐゐこえ治えーて称ふうこれ二枕えをあ
まつ倍こえ枕いそく「カナとそ歎息」「カモとそ歎息」こう

○延約五

○卅八

このふたつあるそれ「マア、と歎息」まさ
カもモ、二言とも歎息なるとぶめゆあ無るとも「カモ」
モ就て「モガモとゝをそへて「ニノミガナ
とゝをそへて「カナホ「テニヲをそへて「ニノミガナ
ニ文字をそへたれのづゝゝ頼ひのことゞとなり「まゝ」カ
と数ふニ文字も添め二言をふまをそへてゝゝゝゝ辞
ふれなまも頼ひ歎ひとおもふ事とのひて
れのつゝまゝる故ゞ中ふまも四そ月後拾遺十五
ふまゝ舟ゝゝむきみあそれとうゞだかとそかゝ
△てゝ云ゝ「そゝうそのゝゝも推量うゆて「うそかとナムニうゝ
まゝ井十四の大和物語

さてもゝまもうゝゝゝゝ

詞玉緒延約六之巻 き

○本書六の巻 初オ むとび辞 き

△大(うき)との圖(はか)り事(ごと)一(ひと)つ有(あ)りと云(い)ふ事(こと)ー何(なに)まで。ハモの活用(はたらき)を云(い)ふ事(こと)ー器(うつわもの)今云(いま)ふ

みをいふ事(こと)なく徒(いたづら)と云(い)ふ事(こと)ー何(なに)まで。ハモの活用(はたらき)を云(い)ふ事(こと)ー

ハモのみ死(しな)ず何(なに)まで倉(くら)の扱(あつかひ)ようゾノヤ何(なに)と二(ふた)つ重(かさ)ねてる又

遠(とほ)しとや何(なに)とこの里(さと)てきと結(むすび)ていつまで歌(うた)のキまで。カラムも

添(そへ)りたる事(こと)叔(おじ)ソノとかて里(さと)てきと結(むすび)てる何(なに)まで変(かは)らの扱(あつかひ)

叔(おじ)が目安(めやす)ル二(ふた)つ重(かさ)ねて仮(かり)ハ徒(いたづら)と先(さき)のごと

ーゾノヤ何(なに)のもちや何(なに)とのて云(いふ)事(こと)。ナラムまで云(いふ)事(こと)。ケム

と合(あは)まるル有(あ)り「ヨ」ケムもやもおもおもの事(こと)

こそれ「ニ」。ナラム「ニ」。ケムル二(ふた)つ重(かさ)ねて云(いふ)事(こと)ハ

○延約六

○一

ヤホ「ワビシサビシ」クルシ「カナシ」ウレシ「おやうホ法ハ」そカラムてふ
をは我令めて現在我躬ヲ以て将来を推量るとの二ツあり此一條を
ふらふらするを不思ホにて有つまゝソレとの事にて決しかたきそ
又次ぎの條くるを云訳立れ扱とよくいかゞ
○同 初ウ 也 始 祖 并六ウ
△おそ事くて云ハ此まゝをくむねなり不の語を我解の
さるとて何ぞやハ不ヒズアラマシ此通ホ故未来の辞のみ
ゆきつく其未来ホもつホ預欲ることのつよ事なる不ホあヒ
○同 三オ なヒ なる なれ 并九ウ
ホ注云云○一つ此ホヒ
わの右の此ホヒなう様ホもちる我ホそそとぐめさうなヒ

細注云ふるヒハさるれぬうもちまゝホ此ホヒ
レよるまゝ乳右の如ホてハふるホうとそゆく云云中略ヒてふう
ふ云解ハ皆ホあヒ此通りくるく云
△今云ハ此ヒてよう一記をナリをニアリと読みをはらまてる
それ一デアリふ云不ふ此ニツをヒる〳〵ヒをホ解ホ通り
てさ一支あヒ
○同 三ウ なヒ なる なヒ 并十一ウ○ホヒとホにを重てハ云云
△てふハ「ニケリ」も「テケリ」ニツなう「ニアリケリ」そう中ホ「ニケリ
も猶〳〵「テケリ」ヒまくして猶きうへ「テケリといへまゝ」ホ「ニケリ
といひてもヒまへさ後ホ一ヒとんヒまて
○同 三オ なヒとホにを重ることあヒ 細注云云略

○延約六

△ 上云ケリナド云語と交ジ一ツ一ツ一たる語の歌意を添ふる例注準
ケリキの事と拘泥みうるれバ論ふべくもあらず

○同 手 拘ぬざまとるとてつる手云云 △以案不論之

○同 四下 おゝそるゝと里

△ 上云ても準ふる事ども載集ども二そのケリと交ジ此ケリ
ても隔ル句と皆合てもをはの語の拘へ扱え推量のケリといふまでふる
もの一手一手二の句も語句ゝ果におの〳〵「トハ」云語を含め手
三ツ七語句の下にヤ又ハ字或含めて「ケリ」手ふの二そを既ふいつる
めく〳〵交ジ云ふべし手ふの句ゝてもをはて「ケリ」の語とふこの歌ども
ト。三ツ〳〵おゝてゐ此ケリ中ゝ此ケリ一ツ一ツ一てゐる拘ふて
推量ふあるゝ次手六の句ゝ「ケリ」つ一つるなのみをとけまりヤ語

○延約六

○三

ゝ川のゐ此ケリ浪タチト。タチツ〳〵ケリ含めつるゝ手七手ゐの二そをこの
句ゝ下ふヤ又ハ字或含めつる語句のゐにハ又ハ字を含めつる手ハ手
十手十一のニそをこゝ此句ゝ下ふヤ又ハ字或ふくめつるゝとゝ上の含てふ
をは含ふふ含て味ふ一

○同 罒 ぬ ぬる ぬれ 手十九ゝ △中文畧〳〵

△今云オハンヌのヌゝ拘ふとて上ニヌネゝ活きたる拘ふといつる
るゆゝ迄ふる様ふて実ゝ云ふ〳〵ふ街をゐて論ふべし。ナム。ニ
。ニヌ。ニネ。イナム。イニ。イヌ。イネ。ゝ活くをシナズ。イナズトてあるまの方
ふ云拘をナムといひそゝ今ゝ居てゝるをシニ。イニ。といひヌゝまゝ〳〵く
そゝ事ゝ早ゝてゝる布ふて云拘ゐれバオハンヌのヌゝ活きをゝといひて
ゝゝ味ゐまゝゝ〳〵されゝ今ゝゝオハンヌの布〳〵ゐゝ活ゝ分ていひ

てそ云ふ「まこと甚ナムと云ふ時も「ニアラム「テアラムの約まりたるもあり「花ノサキナムもザキテアラム「人ノイヒテナムもイヒテアラム松の影こまで今試み給ふ峯こそ我出とく〳〵おいそぐ「ナムも。ニアラム。テアラムの約「ナバもニアラバ。デアラバ「ナデも。ニアラデ「ナマシも。ニアラマシ。デアラマシ「ナバヤも。ニアラバヤ。デアラバヤなり「ニケリも「ニキも。ニアリキ。デアリキ「ニケリもニアリケリ。デアリケリ「ニシも。ニアリシ。デアリシ「ニタリも。ニアリタリ。デアリタリ「ニケムも。ニアリケム。デアリケム。なり「故とナと二と解釈をなふ我らずとも「ず」の活を我ら共にまの如きの根えをもつまの「キエネ「タエネ「ワスレネの「ネ」も皆「ず」又「ぬ」の活くべきトいまと「ぬ」又「ね」をいひとぢむる又「ね」て預ね「ぬ」も「ず」の活くべき様なり「預ね「ナれ「ね」の「ね」「て」も「ネ」とも「ず」ひ又も。ナモ。ナム。ナマシ。又同活

音ばかり行〈移りてもテムともいつまでも用さ後世いひとぢむる又の活用也

○同 四下 「ず」ともつゞきお似たる不をぬとも云

○同 五才 「つ」「つる」「つま」才二十段

△和文書〳〵中古を見るべし「て云活のみは「ず」の條に論ふる如「まし〳〵又「つ」「ちらぶ」いふる事もいふ「ね」とも「ぬ」も強弱の違ひて甚き事也「ず」「ね」「ぬ」又「ず」いひても「ね」「ぬ」ひても甚き事也「ず」「ね」「ぬ」ひてもそうし又「ナバ。テバ「ナム。テム「ナマシ。テマシ。皆一の甚おいふる如く「ニアラバ。テアラバ「ニアラム。テアラムニアラマシ。テアラマシて十行と活く「タ行とも「ね」の違ひありまし

「ニキ。テキ「ニシ。テシ「ニケリ。テケリ。これも上と同じく姫重之丸
示よめむむ仕姫重ねるといざめ思ふるもよい仕墳ごりて
まぐく拾そのー紙味くへ。ネとテヨと預の辞も相並べ
ていくる云まい遠一定もしー実ふ相並べくそネやいくるり
ヨ我そくテヨとくをるヨ文字を書きても等もべしや何そもの
お事ーあらむ叔を相るうだばるる事ーぬらきしー叔次のテヌ
。ナヌの考究にうさくりくる云又おろうく
△かくなうもうう得世我やそ云ーてぬ完れきふれ有とるるく
○道志ーてやみやいまるみあり板の実代あなくふうみとしてるり
△てこ仕ニそ初のうもと「世我つくしてアラぬやふ次のと「やみセデ
アラぬやそく云デアラヌの姫重ねて遠一るなり

○同寺ぬ ぬる ぬま 并十九姫ニよう仕ヤニ十二姫 う る う ま まで

合せて十四姫の事

△本文書くお出我るるくーてこ仕一姫の解釈十四姫と下六姫と
北分貝種くいそまたる各ととるうハおしー書一る本もあ事と
まつ大文のようーされど凡紹鏡の姫くおりてふおの事一北
書くそつそらく論らるわくてふをはに訳る拾と活用お訳る
拾と分貝ある我一列ニ混ーて親則を立ら事ーお志姫ニ北数
なのヒふ江て初ん海学共姫とのみなまりて論らる種く北
解釈も皆八街お訳る事ーにーてーてまをはおを訳くさるうう
故お居文子の玉緒八街北二書をニ合せ四ニそ玉法い大業勲
功云基ーをまとも姫ひうくハ街ふ玉法のわくふんをそ労せ

○延約六

さまた妨げ」てよて已う振る不ら活用さる抱ハ八街ヲ
ぬ一づけて来れたる抱えたる抱ふぬ一づけて行迎え
ぶをそぶて初学ぶ者ニ便利あらしめむとおりふのみ
○同 分 ん 条 ヲ三十九段 △お文暑く
ふれおふあ一さらめとり。咲ぶ
△ふれ分男一「ふシヤとふべき紙メヤとふべきれ今ぶ二
枯に折一ま又ふれそのメとそれ遣ニてそ四のまくメヤの條ニ
る紙ふて志る一今ぶメとムぶ枯一なるおとあ一で「アラズ
アラム。サレドモとふべき紙ムサレの約まりメとるまバ約とふる一叔と
メヤとそれ一句お書ニ足次の言ひ「ふをらめどふ。タヨリアラム。サ
レド「ふ一らめどそれ。サクラム。サレド「あとおめどふ。アリナム。サレドとふ

を食めふる紙引きてふれでそを得ふる抱ふ社云ふ引ふる言
ぶメド。メドモの抱ふ社ふムメの抱ふ中ふ挙てて来をり
そて吋をおるまなり此不の形論りあ一次
○同 ハウ らん らえ 条四十段 ○かふぶそふ亜一ふらん
んさ一ほりそふて一をふれぶ消あ一ぬまぶそふまふむ
久一ぶ社そふをき亜ぶ月お今ドお一づ一ふぶそふ一む
△次の十ふ一亜下ぶ段男一お亜一ふ一て云ぶ下ぶ言の像一
羽ぶ解さ海ふと好む一先初の段ぶ十ふ一の一あぶて△ふぶ亜一
「ナドとふ詞を食めふる抱ふれバそれおてんふまバいとまー一さる紙
顕昭の本ニ「消あ一ぬまるのふとみ一ふるうトおをんて連ハんふみつきて
好ひさ海お放ち一ふむめ足てふ中お動一ぶ言と服行せ一お

く「ゆくてめて」をうけぬが二ヤとく寸二ヒむと「ナドまづんちく
寸三ヒ同一格寸罕「るとうてゐはみや人ヒみるるむ寸ゐとうら
ゐまとをれぬ二ヤとく寸六と「そぬもつて」ナドニ云寸七と「声ゆさ〳ヤ
云云寸八と「ナドちとるるぬそのニ云寸九と「ナドろるみむとヒそ
云云寸十と「ナドゐ為ゐ云云寸十七と「ナド紙をろ汚み云云寸十二
ヒと「ナド人のんヒそおなるるむトゐり

○同 九オ 小書 又のもの一るヒれあヒそれか

ほとき沢くゐれぬふるの一ゐ△ナドろるヒ

△次ヒ云ニ罕〳ヒそヒ云ニ條のニ云ニ寸も同一格寸て初のヒ服身せる
ぬく二ヒ句の下隊ヒ二ヒとこの句ヒやに各ナドと合めさる

○同 十オ 本注ニくの下

ゑや一まれるのゐヒをさてもむるる一人をつやまれ
△次の行罕〳ヒそヒ云ニ二く初のそ
アラバヒとのゆきて城ヒむるむまて
「居このねのナドと初句ヒ下へ合めさろ

○同 日丁 まく

むる一へやとれ来一きはるる△サテヤとる里ふ一ル時てきろるむ
△ニ手ヒ云罕〳ヒそヒ云ニ不ふ挙〳るヒいそのろもてゐれあそとヒ十二
トテとる排居りあそ〳ヒ寸ヒそヒ接ヒ二重に整ハ〳る数例の
舎てゐ我はるあおの一中行ヒ△下の下へ。サテヤとる語を舎
めるヒ寸六のとそのヒ行とも又ゐ一遣一ヒこと「大元ハ云
一ヒ人のこるみそれサモアラヌ二。ナド拙思ふことゐ添らるろ

むトこれ示ちと「カナと並てふつ〜不調ちう味ちを〜
細注畏〜奉出ち候こて志ちる〜

○同 十ウ んとちこん ぎとちこん

いまくよみ彩むちれと志ちを先絶ちるといつうあくむとちむ

△とち式仮本擧〜ちる十二そ〜その初え上にヤ何ぬこと〜て其数解
を「ム。ラムと二重ホとぎめちる〜「ムトラムのムトとちふマシ先約まう
まて三なる候志て候志仮まてムとそいつる〜ラトアラ式春畏なまそ
アラマシちう下先十一そ〜並次〜「まいトを條の三そ〜畏〜

○同 十ウ まく

△日のれ設ふ多つをまう〜もう〜ちを志ちをあ堂をぬホきるむとちむ
昭和ちう加よ先川敏ホ志ちるう〜ちふもそう〜ホヤまむとちむ

みやこと〜いふの松志いきう〜ふとせふホゾあそむトとちむ
△細注畏〜ちる多ゞゾヤ何のて志候そう〜トのみいて要指
とそ何ち指ちふ仮せぎるまこと〜ちらぬちつ〜ち次け三そ〜
か彩月先む〜倉て志候はの彩俗志てよくも調ひちう

○同 十オ まく

きのふちるびくだのトふ志ぬ的目ホ系守やあつとまむ
△次の三そ〜畏〜ちる式ぬ〜ちゞとを活をはくされめやすう完
ちトされか「ムといそびく〜てジトスラムとふ〜ふトこそいらのつま
と初学先為ホちめさむ「ジととズアラマシち約まり志て「あそ〜
ちゃアハズアラマシ志て志候志ていくむゃ。スマズアラマシ志て志候志ていくむゃ。ズア
ラムなトされだ上ち「ムトスラムれ「ジトスラムれ同〜指〜

○八

○延約六

○同 十三才 きん きゑん 才四十一匠

△お注一云ク昔ク今云「ケム」「ケル」ノケモ同一稱ニテ「ケル」ト云ヘバ現在ムシロ去ル方ニ云稱ル云ヒ去ル我思ヘ(ゼ)ケト云ヒ同ジ如ク(ヘ)ニ我等ガ「ケム」ト未経(キヘ)ノ詞ナリト云ヒ「ケル」ハ「ケム」ノ方ヲ未(キ)ニ経(ヘ)ノ詞ナリト云ヒ「ケム」「ケル」モ未ノ字ヲテ「キ」ト訓ジ「ケル」ヲ「ケム」ノ方ヲ未ニ経

○同 十三才 なん なゑ 才四十二段○つねのなんいおとゐるまもり
△今云つ称のかた数のナム此事ハ祖を一預よりナムれ名ふよむナム
にあ〳〵次やなど〳〵数のナム此みを名のナムとそいひ〳〵
○同 十三ウ 名〳〵これるん此は指二つを一まかさるまらうつもり
人まをぬるかあのち此まるふよひ〳〵ことりうもれ神なるむ
△とそ此段の引ふ七これ井此ふ何ふよの段六その名れ預のナムれ
テアラマシ此治まりてナムとるれるん此ふれナムと手をまりてテ
アラナムるれで次のナをれナムと称さるまてそれにマシの治まり
てムと称さるう添もまてナムの一指とるれるん叔と条此何のナムく
てのナムとと掃此申盡二まとなく〳〵ての学ふいよ此ナムふナ此一言添
をりうさるるとくんるまふ神とまるん指せて添数もいひあ〳〵ぬん叔ハ
此段の井ふナムれ入まさるまま〳〵ふあ〳〵ふくもあ〳〵ふかそ
れ治るる〳〵こりまる申ふ法さる〳〵
○同 十四才 ふるうふ えけせてへめまをよりつであり
△とそけぬ〳〵とアヤワれ三行の差異をるさ此とし〳〵まヤ行の
工れぬきてア行れこそを入らまとさるまて書る〳〵ア行と法の首
に有て作申をあ〳〵ほる音〳〵サ工。サ工「ヒ工。ヒ工「三工。三工。なぐそ皆ヤ
行るれでこて「ヒ工。ヒ工るでヤ二段申と活け「三工ナム称申て
書る〳〵此ふの引ふ亜申注細注とト申書〳〵申ふ法る〳〵
○同 十五才 まる〳〵
山のつれいるとにるみる書名〳〵ものことをへさるむこるるさと人
平書そめのくるほれふいる人とたとる〳〵れのをりまさるものむ

○ 延約六

△今云氏布の御座ふ来氏まゐ法き我ク〻と居くい
ち里ー〻と何の事もおやなのまゐ〻何なでるる思へめるらー
てもんるらまゐ次眠ふ云母の子ふ春庭也ー八街ど来の法き
を要抜とー〻てコキクとつまゐまて漆くー漆をきくこのくまとるまて
おりふ屋ー〻注祝男ー〻

○同 十五ウ 本注の下小書漆後拾遺十七

とまのくにうち守まるれぬる

△七云この新三行とむらるものとふ云へうに云ことを全く写ー漆まゐ
まゐ作むよう漆おろー〻まるまてといとへて撰て思ひまゐぬ
る〻作者とよのまれー〻事ー論ろう撰るう毛まる注祝男ー〻

○同 十六オ 『そのこふ屋ふるん』 △引今男ー〻ふ我まるへ〻ー〻

△七云ゾおこふ屋ふナムといそれまるふ男ー〻号ゾとしてふナムれまゐ
みく其ふ事ー八三の其ゾみ部の自注ふ種く峯なる事ー一ッ云

○同 ウ一 本注云さて代るん『』を上代ふそあるをとふ云

いつそあれこれふくあとふあくいねたうくてしころ云のーをきる

△今云氏万をふれナモをゾとを必ず考ふるふ万ふの初句ふ
きて「イツハ也て将ふりたるん云ぶあり
とふあらねとるれそイツハ也てほまる我ナモの乾法をそ〻て調
我とのふるん然ど「ナを。ナア「モを。マア也て欲息ど将くされ法あ
ゾとゆもと思れー〻そろー〻

○同 ウウ 『まー』 長ふ下るん『』

△氏下れおふ云ふ注名をー〻て男ー〻て云マシふ狗あり三なるゾ

書役ホムといひて「ユカマシ城。ミム「シテマシ城。シテ今ホの
数ヒて全く同一くもで延約の表ひみくさる後くくうるそ記ぶ事
そホいてるいうでんるれいみやあ〜むム打ミホ店ぬ〜はやに往くえ
「当それ捨たるくめ捨といそれるまでにうつ〜みうに上にい
しぬくマシとくめでムヒて延約の表ひるまに推量ると欲ると其二ツれこと
又推量ると欲ると其二ツ紙事こるようホいるう〜かくぬっ〜げよ
は捨彼捨ととよと言ハよめめ捨と初学ひやうう退屈ひるこ
○同 十九オ 5ー 附 3ー
○本文5ー「ハらんれ活きたる辞ヒて数の主現く将来のあぢめと
やもめれと右き言所ヒ城考つるふ又さるこのみおあぬやー云ト異
△てミラム。ラミと数れ主現く将来ヒ云説もあこうに又てホ店ぬ

それ解れさるよろ〜きと文まヒ今完城解うぞ「ラムれラ
と其経を順ハ第一てもと推城推そぶる言とれ欲るうそハ猿
をマシラとうぬきそマシのお群さるおも打をを推さぶてマシラ
とハ子供れ、おむヒさる城コラまし「オノレラ「ワレラ「ヤツコラ
まし其境場み一ていハ野をノラホこホと数くれムれマ行ヒまこ
ておもきを順ハ第一ホてそれ推量れ決と成るうれ
其ラトムとおあいて「雨ノフルラム「人ヤユクラムれ数の辞とそなれ
るくれラミれぬきちと越を順ハラの辞ホミメ。シムれれシの辞れ
添ハさるなれを俗矣に解うぞ「ラムと。大方カウゾアラウ「ラシれ方
と。キツトサウデアラウれヒて一安一完ヒて大方
ホ数さるハラム改文こ一て数たるそラこるる事城活

この世てシとうくきいそまもとム云辞のことと不思
ルこ我得ざるよりとかくる況と出来るく
○同 十九ウ三行 本文あゝ〳〵 小書畧こまれあゝん なゝん
かゝんのんを活のゝてゝとゝるれいきのらゝと同ゝきぬくれ
たきれらゝゝれよの言と離きてゝツ此辞る我 小書畧 はらゝ上此言ふ
附れいみいまうこの異くされとてあれその調への接小皆きれらゝ同ゝ
△てこは活まゝ大ふ活まう「アラシセ。アルラシ「ナラシセ。ナルラシ「カラ
シて。サムクアルラシセて「ユクラシ祢のラシと祢ル達へあゝぬを書く
ヒとくうふいまゝ思ふるとく紀様るう「アルのルと。ラシ此ラと
約まヒ「ナルのルと。ラシ此ラと約まヒ「サムカラシの。カら。クア此約
まうてカとるヒ。アルのルと。ラシ此ラと約まうてるく

○同 十四行 まえゝ〳〵 これいた此るをまの活きるまてらヒ
ふきれ活きいたのあゝ〳〵てるヒ此接と同ゝをまたヒ此ゝ〳〵を芸
のみんと活くまるゝ〳〵 ハいそれれ 此まべこれいおよるらゝ〳〵ふふ
る辞く一説おきゝ〳〵 ハまるゝ〳〵のつゝ 万葉「まてべやとふる
ゝ〳〵 ハまるゝ〳〵 もうれきらべやのつゝありうる辞くとゝいまこと万葉「まてべやとふる
らハをれるゝ〳〵 もうれきらべやのつゝありうる辞くとゝいまこと万葉「まてべやとふる
△てこは ケラシセケラムといそまぬをまて上此ラシれラム此活きるまて
とんねまゝき此なとのくんふ交断れるゝ上のラシセラム此活き
ゝヒと思へ此不ヒ此ゝぞとゝ思へあやまらまゝゝまや△大阪。ケリ
。ケル。ケレふ「ケラムとゝ接良らをゝゝ奴「ケリとゝて此それの事法
と未有（キテアリ）の約。ケリるれバ「キテアラムとゝ接良らあヒそれ交ゝゝ
て彩ふ的ふ「ケラシとゝ法ゝうく奴「ケラズの法セケラふ交ゝゝるまて

ハそ〳〵「ケリおゑ〳〵て「ケラズと云ふのそてるゝそゝ「キテアリそれおゑ
〳〵て「キテアラズヤ。キテアリとゑるゝ」是まては一段かんねんゝ
○同 廿才四行 おゑされぐてゑ我なのとゝ〳〵ゝ
△とゝまておをはの捨をラシと同〳〵ゝ
ふぐゝむや
○同 四ウ 〃 ておこのよふ〳〵
物ごとお娘そこの家〳〵きりとゝもつ〳〵ろ〳〵ろひ
女所ふろ〳〵とゝ〳〵そおるゝ
△とゝこゝと「みもつモミヂッシテ移ろひ
三ツシテそめるゝ云ゝとゝ次のこゝ男〳〵是まゝ〳〵ゝ
をナガラてゑ居おろ〳〵てれ女まで〳〵かゝてゐれ理ろをさゝめ本

あそよて今のめゝおんねをし〳〵ゝ
かよのふいまま〳〵そよおツゝやゝ
どゝテとゝ〳〵ゝ女をツゝやゝいひてゝ
ホテをツゝおかよゝともツゝそテおを
坂の祝子有せるハいゝおそや性祝男〳〵おまをえる〳〵
山そとそ娘ここおとおひ〳〵ゝ
△とゝこゝと「庵のゝ〳〵祖父母をさは
この居る捨〳〵ゝ下ゝこれおろ〳〵ゝ
高机山なとおゆつゝあ坂のせ祝ゝこに年祝ふるの
△とゝこゝ件のおそれ上ゝ祝めゝ〳〵「何ツ何ツシテとゝゑてもきこゝ
おそあゝねとれ引まぬ方あうナガラときびでこゝをゝぬハそれ

る死なりこゝに本訓四そくお注異そく本訓お合せて味そく
○同 廿三オ 下にこゝろをふくめていひせつるつ』
　主のくみたてるやいつこゝよりか
△しゝ云ひ條お左ぬ一そく毎お含めるこゝ絶えとゝれるそ
にる事おおゝそゝて本紙そふ訓らくかゝ様せつうきさ備ふ
とゝるくなふ初んを榛ー〳〵るお本ゝまつゝと一のまゞ訓
ーごとゝ「雪ハ降ツフリッシテアリ」て何まの訓ひ寸ハ拵てん
おきゝいと安ー次の十四そく再細注お泊とゝ異そくおをるてー
　田子ゝらふ打出てこれ白妙のふ」ゝるねよまるいふうちて
△しゝ云ひ訓ひ三の句ゝのふ今本紙絶せらまゝるくゝ理りきこゝあれ
どゝてゝ白妙おとゝこゝふあゝ訓ふーの條ゝ考ーべにるのつお

ゝて本紙ば白妙をゝてふーの條ゝ松藤ゝて云ゝ訓ふ續
けまつ「フリッフリッシテアリの拵ゝとよふいつるうゝー細注異そく
○同 廿四オ かる
○本文おやよゝてかるハかゝと云藤おな紙添ゝる拵ゝ云云
△しゝ云カナれナゝ一の書おれいるゝくナリの異張ゝて「ケリナ「ケラシ
ナねゝナゝそゝ遣ゝて「ケリナ「ケラシナれナゝ一言ゝて歎息の張るれい
こ又万葉ふカナてゝ張れおゝ云ゝ訓ふさゞおのまこふ考ーあゝ既ゞ書紀ニ
哉ゝ字我カネとよめゝてーをゝ
　去やとゝ記るおゝ死きゝとるむゝくハせるふれおゝくゝ
△しゝ云ひるゝ一れおまふいゝてーゝ「おゝくれある力ァと歎息ーて
「ナカズモアルナリと治ゝせるゝこゝ三そ效そ

○同 廿四ウ 次ぉ徒あるれおゝ〜

△今云ル て我れぉ徒と云ゟ社あ〜

それ〜妻〜このけもよてこそれ男〜又次ぇ二ケ條ゎ不論あをれ

八葉ぇ

○同 廿五オ れど〜ことのかゟ

まつ人れこゝゟれなぉうこゝなの呼つる枝をおて〜まるゝゟ

△て云カナぉをど〜こと社てをゝあ〜次一そのう〜れど〜こと社を

なりカナ社歎息ある事ハぉとおゝ〜

○同 ウ ぬゝゟ

出てあるむ人をとゝめむとて〜ゟきふとるうれ万にてゟりこゝゟ形

△今云これれヌカナと一條ゟまゞまぉあ〜次ゟれ二そ〜細注男〜

○同 ウ ゟゝゟ

△此条不論ゟ〜

○同 ウ ゟゝゟ

△今云此条注ゟ引する後拾遺十二「やまらもで神ゟま〜」抱

をさよみけてうゝふ〜くと云社有猶ゟ〜多ト次の二そ合て云れ「万

ナ社云ふ上の「ヌカナ社流類ゟて又ゟ。ミルカナぉいひても。カナ社を

ハ何ゟれ意そゞ「ミガナと濁るこそ預ゟ〜ゟの。カナとそ意へ

さゟゞハ「ミガナ社注へく〜〜〜〜

○同 ウ オ〜ゟ

抱ゟとうとゝぬるぉ事ぉとうとうれおいふ〜ゟな

○同 オ て〜ゟ

耳ゟ〜社山のくちなりえそ〜多思ひのこれ下てゟぉ勢ま〜

△この四そくおよび第のてにそれぞれ異く如き
をそれぞれ一今云中在ぬ一も「テシガナを取ると
人も「テシガナを取ると云る事一誰くも知ておも一無るに「テシガナと云
一括あらばテもと上代語なりてテシガナと須
のて我れ代添そをたるとこをおるに「テシガナ」は是おおるで一叔そ
上のシガナとの類おあ一代統くおるへ一まに代事代注にる「る
濁後撰九のうと「テアリシガナ中そ是本名代カナの流類と
○同 四丁 走ぐ 同ウ○走ぐ同丁○ふ一ぐ
△右四ヶ條不倫る一
○同 六分 走がも △引文奥一○本注おおよて須くきおぐるかも同一も
必もるお 走ぐおふ一ぐるとふぐれるまそ外ハ倫る一

△とて云「シガナ」「テシガナ」「シガナ代」「テシガナ」は。これ。これ上に多て代文
字の須治るまおあ一ぐ「シガナ代」は須あるくおのれいてるうめ一
○同 廿ウ 小書 新勅撰十九「いせの海おきつ小浜おぐもくみて妹
ぐあれつとまもむこまハ例多代ぐるふ又源氏橋姫巻の何こ
「かのえさち綾ぐおとあるふも城をお写一誤まる如へ一
△とて云「ふおー」ぐもと書きを字あれば「ふおうもいひて誤脱おこを
含ませてるく代三ホルを含ませてるまか表くに云一かく表
事れくみのうへ一史れ一おくに云一かく表
「表さもをのヨ又字代下へモ字代誤ませてきけ代写一誤まるあ
らぢうーまて含誤と同位の音代ふおまて同一ぐまバ撃次
と例多一次の條不倫るをまバ撃次

○延約六

○十七

△今云七の巻ゝ万葉集古風ゝ論ら人
めまとそゞ井に初学ゝ為務たる
あらそひ引文章の旅とまゝ云
る脇もあまいそれをもちゝお除ゝ

○本書七の巻十四ん」のそれも
あの思ひめ人をやれと多志ろ
る山の菱ゝ多志ぬきゝる
△こゝゝ何泊男ゝ云ゝ條の
をゝんゝてゝ何ゝ海をゝ
條の「も」も。キカセモ」多の下お
存異せるゝ服有のゝ次の

○同十五才かおもてゝ
ゝ称りつゝ今まる妹とな
△ゝゝゞゝ法カおもゝあゝよ
にナラムといひ一格をゝ次の八
「何事ーあまそゝ「何事ーあれバナラムるゝ
「いひのるおナラム。マアなり自除の
○同廿五ん」のそれを
△今ゝゝお挙ゝる詞と服有の
らさムを「去なムをと思ゝ「いなム
異ゝおまおあゝ延ムを存異
いゝると同一格ゝ去れそ

○延約六

○同十五才かおもてゝそ」

ゝ称りつゝ今まる妹とな

△ゝゝゞゝ法カおもゝあゝよ
にナラムといひ一格をゝ次の八
「何事ーあまそゝ「何事ーあれバナラムるゝ
「いひのるおナラム。マアなり自除の

○同廿五ん」のそれを

△今ゝゝお挙ゝる詞と服有の
らさムを「去なムをと思ゝ「いなム
異ゝおまおあゝ延ムを存異
いゝると同一格ゝ去れそ

○十八終

慶應義塾

ら欲するまゝ見迄欲くまゝ云ふまで
を本居ぬ〳〵ムのまゝ十といふまで〳〵そういう〳〵既ふ「トにまゝ
云條ゝをとゝトもゝ同右言法姫のみまゝ古言ふか〳〵
新事まゝ〳〵して外ぬまゝゝ古言ふる既に遣ひまゝをこうる理ゝ
とゝ思れ以学者諸〳〵ムんをとゞめよ

昌平坂

国立公文書館
National Archives of Japan